

# 海老名弾正と柏木義円

笠原芳光

## 一 周辺のなかの一人

「海老名弾正とその周辺」というわれわれの共同研究の主題の意味するところはやや曖昧である。

「その周辺」というとき「周辺」とはなにか。周辺という言葉はふつう空間的な概念として中心のまわりにあり、しかもやや離れた領域をいう場合に用いられる。だが、ある人物とその周辺というときには、その人の周囲や遠くないところにいる「人々」をさすことが多い。それは必ずしも空間的な近さではなく精神的な親しさをあらわしている。事実、海老名弾正という人物はつねにそのまわりに多数の、それも多様な人々を集めており、海老名はそれらの人々とさまざまなかかわりを持っていた。その意味ではこのテーマはこの人物にふさわしいといえるだろう。

「周辺」という用語と異なるが、おなじようにある人物との関係をあらわすのによく用いられる言葉に「時代」というのがある。キリスト教関係でいえば佐波巨の編集による『植村正久と其の時代』<sup>(1)</sup>という書物の題は有名である。この「時代」はいうまでもなく時間的な概念であり、明治維新のすこし前から大正末期まで、文字通りの日本

の近代、激動の時代を生き、植村に関して、「その時代」というのは適切であろう。

ところで「その時代」が「その周辺」と異なるのは、前者が時間的、後者が空間的ということだけでなく、「その時代」はある人物を生みだした時代という、その人物にとっては受動的な意味と、その人物がつくった時代という能動的な意味との二重性がある。「その周辺」はある人物が中心になってつくった周辺をおもに意味しており、周辺のほうからその人物に作用する面をあらわす意味は弱い。従って、「海老名弾正とその周辺」というとき、その「周辺」には海老名と神学論争をした植村や、また交流のあった内村鑑三は含まれないだろう。植村や内村はそれぞれ中心的な存在で、他人の周辺に入る人物とはいいがたいからである。しかし「植村正久とその時代」というときには海老名や内村もそこに含まれる。それは「時代」という語のスケールが「周辺」という語のそれより大きく、また内容に相互的な要素を含むためであろう。

もっとも、この「時代」もまた「周辺」とおなじように、その人物と同時代に生きた人々との関係をあらわしている。米国のプレスビテリアンの宣教師J・H・バラやS・R・ブラウンの指導を受けたのち、日本基督教会という正統主義の教派と、その神学校である東京神学校、そして富士見町教会の形成にほとんど生涯を費した植村正久について、「その時代」という場合、その「時代」はおもにキリスト教に関する時代であって、一般の社会や文化を意味する時代との関係はそれほど密接ではない。

それにくらべて海老名弾正は、時代に関して植村より三年早く生まれ、一二年長く生きたというだけでなく、日本組合基督教会という自由主義的、むしろ多元主義的な教派のなかで、それに属する安中教会、神戸教会、本郷教会などを牧し、また同志社という総合学園の責任者になったが、その思想においても行動においても、キリスト教

界にとどまらぬ領域において活動した。だから海老名については「その時代」といっても一般の社会史、文化史にかかわる時代も含まれている。キリスト教界、とくに日本基督教会という一派によい影響をおよぼした植村に比して、海老名はもっと広範な周辺を有していた。その意味でも、「その周辺」というのは海老名にとって妥当な表現であると思われる。はじめに「海老名弾正とその周辺」というテーマは曖昧であるといったが、むしろそのことが海老名の本質をあらわしているというべきだろう。

小論では「周辺」のなかから一人の人物をとりあげて、その人物との関係、比較、異同などを見ることによって、海老名弾正という人間を明らかにしたい。「周辺」が主として人間を指すとして、そこには主人公と同時代のおなじ社会環境に生きて、なんらかのかかわりを持った人々と、肉親とか家族とか縁戚とか、いわゆる家につながる人々がいる。ここでは前者のなかから、それも複数ではなく、一人の人物をとりあげて海老名との関係を考察してみたい。いってみれば「海老名弾正とその周辺」の総論ではなく、各論の一つである。

それも海老名の影響をストレートに受けた、いわゆる直弟子といった人物ではなく、海老名と密接な関係にありながら、その思想においても性格においても生きかたにおいても、そうとうに異った対照的な人物をとりあげてみたい。そのような正反対ともいえる人物との対比によって海老名の人間像はより鮮明になる部分があるに違いない。その人は海老名の周辺、それもきわめて近い関係にありながら、海老名からは自立した存在であり、むしろ周辺のなかの異端的人物であった。また、たんに海老名から影響をうけた受動的な周辺ではなく、海老名を批判している意味で能動的であり、主体的な周辺であった。逆にいえば、そのような人物をも「その周辺」に含んでいた海老名という人間の器量の大きさ、あるいは清濁併呑が窺い知られるというものである。

その人の名は柏木義円である。

(1) 佐渡巨編『植村正久と其の時代』全五巻、一九三七年—三八年、教文館。

## 二 海老名弾正と柏木義円の関係

ところで柏木義円は海老名弾正とどのように出会い、どんななかわりを持ち、また海老名をどう見ていたのだろうか。

まず海老名と柏木の邂逅と関係を考えてみよう。海老名弾正は一八五六年（安政三年）筑後国柳河藩士の家に生まれたが、少年時代に熊本に遊学し、熊本洋学校に学んだ。教師L・L・ジェーンズから聖書を教えられ、その影響によって、一八七六年（明治九年）、花岡山において学友らと「奉教趣意書」を誓約し、いわゆる「熊本バンド」を結成した。そして翌年、京都に開校されたばかりの同志社英学校に入学し、校長新島襄の感化をうけた。一八七七年（明治一〇年）七月、新島の勧めによって、その郷里群馬県安中に夏期伝道に赴き、翌年二月、ふたたび安中伝道に行き、三月には新島を迎えて洗礼式を挙行し、安中教会を創設した。その後、一八七九年（明治一二年）に同志社神学校を卒業してただちに安中教会伝道師に就任、その年に新島から按手礼をうけて、同教会牧師となった。

いっぽう柏木義円は一八六〇年（万延元年）越後国三島郡与板の浄土真宗の僧侶の子として生まれたが、まもなく父が亡くなり、困窮のなかで新潟師範学校に学び、さらに東京師範学校を卒業した。一八七八年（明治一二年）に父祖の郷里安中にちかい群馬県細野西小学校という、教師は校長のみの学校に校長として赴任、安中教会員の萩原州

平に出会い、新島襄のことを知った。そして翌一八七九年（明治二年）に萩原の甥の根岸小弥太と相談して神道、仏教、キリスト教の三者立会演説会を開催した。その演説会にキリスト教を代表して話をしたのが当時、安中教会に着任していた海老名弾正であった。これが二人の最初の出会いである。そのことを柏木はのちに回想して、「予は如何にして基督教信者となりしか」のなかに、つぎのように記している。

明治十二年の頃とおぼし、予は群馬県碓氷峠の麓に近き山間の細野村の小学校に奉職し、一日同僚と語り、神仏耶穌の士を聘して立会演説を為さしめ之を聴くも一興ならずやと云ふ様の事より、学校にて演説会を開き候事有之、其節妙義の神官は事故ありて不參、或る僧侶と海老名喜三郎君（今の弾正）とが演説被致候。其演説には別に感服致せし事は無之候へしも、予が同僚に暫し同志社に在て海老名氏と相知れる一青年有之、演説後海老名氏が此青年の事に就て懇々予に依頼せられたる其真面目なる精神に痛く打たれ、自ら省みて我が輕薄なるを深く慚愧し、此時始めて基督教徒に接して密に畏敬の念を生じ、其後蔵原惟郭君より「天道遡源」を寄せられ、再三翫読略ぼ當時の教義に通じ申候。<sup>↓</sup>

これは柏木にとっては海老名との最初の出会いであると同時に、およそキリスト教なるものにはじめて触れた機会であった。柏木のキリスト教に対する心的態度は神仏基の三教を比較して学びたいという動機にみられるように、当初は教養的関心であったと考えられる。しかし、そのとき初めて接したキリスト教の伝道者は「真面目なる精神」をもって柏木を打った。このような教養以前の人格的なものこそ、柏木にとっても、そしてのちにキリスト教

的人格主義を主張した海老名にとっても基本的なものであった。

この出会いの翌年に柏木はかねて噂に聞く新島襄が教えており、そして海老名がそこで学んだ京都の同志社英学校に入学することになる。同志社に入学した柏木は新島の人格に圧倒され、しかしキリスト教の教義にはなお疑問をおぼえたが学資に困って中途退学し、一八八二年（明治一五年）にふたたび群馬県に帰り、細野東小学校に校長として就任した。そして生来の虚言癖に苦しみつつ、安中教会に通い、海老名の説教を聴いていた。

翌一八八三年（明治一六年）一月四日、柏木は海老名を媒介としてキリスト教に回心した。この日、安中教会の礼拝において執行された聖餐式中の海老名の祈祷が柏木の眼を開いたのである。そのときの模様はさきに引用した柏木の文章には、つぎのように描かれている。

然るに、明治十六年十一月四日不図安中教会の礼拝に列し、海老名氏の説教亦何の感も与へざりしが、折しも聖晚餐式にて、予が未信者なるを知られざるにや、宮口二郎氏はパンを予の前に出されしも、予は何となく物体なく思ふて之を辞し居りしに、終りに海老名氏は講壇上より、今此会衆中に未だ此の聖餐を共にする能はざる者あらば此の次には共にするを得る様に、との意味の祈祷を捧げられ、予は頭を垂れ居る間に、図らず、此祈祷に同じたりと覚へしに、其利那何物の力か予が心中に加はり来て予を動かせしものゝ如く、予が心忽然一変明に神の存在し玉ふを認め、宛ら青天白日の境に出でし如き心地し、志望も趣味も全然一新、今迄西に向き居りし者が東に向きし如くに思はれ、彼の虚偽をば悉く告白して偽善に依て博し来りたる信用と名誉とは都て破壊し去らんとの決意勃々として抑へ難く、我れ乍ら我心の變化に驚き申候。<sup>(2)</sup>

回心にはそれが急激におとずれる場合、徐々におこる場合、印象の強烈なもの、感動の弱いもの、多種多様であるが、そのなかでこれは鮮明なほうであろう。そして翌一八八四年(明治一七年)一月、海老名から洗礼を受けて、安中教会員となった。そしてこの年、同志社普通学校に再入学した。柏木にとって教会における師は海老名、学校における師は新島ということになる。人格、信仰、思想の全体にわたって柏木が終生におよぶ尊敬をはらったのは新島であって海老名ではなかったが、すくなくともこの時、海老名と柏木とは授洗者と受洗者、牧師と信徒という、ある意味では精神における決定的な結合を持ったのである。以来、おなじ教派である日本組合基督教会に属する先輩・後輩として、なにかにつけてかかわるようになる、その関係の接点のいくつかをあげてみたい。

まず、柏木の姉が海老名の家で長年、働いていたという事実がある。柏木が同志社在学中にすぐ上の姉(3)の夫阿部信武が病死し、むろは一男一女をかかえて途方に暮れたが、安中教会員中山光五郎の世話で海老名の家の家事手伝いになり、一九二八年(昭和三年)に死ぬまで海老名家で働いた。柏木がこの姉のことに關して海老名をどのように見ていたかは、つぎの項目にゆずりたい。

なお柏木がむろに宛てた手紙は「海老名道子所蔵海老名弾正史料」のなかに一七通あり、また同史料にはむろが海老名家において記した一九一七年(大正六年)と一九二五年(大正一四年)の日記帳も含まれている。これらは「柏木義円と阿部むろ」、あるいは「海老名弾正家における阿部むろ」といった主題の研究には重要な史料であるが、ここでは省略する。

ところで海老名は一八八四年(明治一七年)には安中から前橋に移って群馬県全域の伝道を推進し、さらに東京に転じて本郷湯島で集会をはじめたが、友人横井時雄の家庭の事情から横井が赴任する予定であった熊本におもむ

く。そして草葉町に熊本教会を創設し、熊本英語学会を熊本英学校に発展させ、さらに竹崎順子を中心とする熊本女学校を設立した。

しかし海老名は組合教会の要請で日本基督伝道会社社長に就任するため、一八九〇年（明治三年）一〇月に熊本を去り、京都に移った。熊本英学校の校長の後任には蔵原惟郭が決定されたが、英国留学中のため、とりあえず校長代理を置くことになり、同志社普通学校を卒業後、新島襄に囑望されて同志社予備校主任をしていた柏木義円が急拠、赴任することになった。

柏木が同志社から熊本に転じた理由は、柏木のほうからいうなら、この年の一月に新島襄が病死したことから同志社に対する愛着が薄らいだことが考えられる。また海老名の側からいうなら、洗礼を授けた者が母校において教師や主任としての経験も積みつつあるということで、とりあえずの後事を託そうとしたのであろう。このときの両者の交渉を窺う史料としては柏木の書いた「海老名先生と私」のなかに、「海老名先生が其創立せし熊本英学校を去りて日本伝道会社の社長たらんとせらるるや、私を買被つて強ひて暫らく其後任とせられた。私は固辞したが、人は学問をする<sup>(5)</sup>と憶病になると先生に激励されて、其れならばとて之を引き受けた」とある。また、その頃、熊本英学校に学んだ福田令寿の談話につき<sup>(6)</sup>のような部分がある。

柏木義円さんが来たのは、明治二十四年の一月でした。まだ割りに若うございましたな。われわれ生徒よりいくつぐらい上でしたらうか。むろん独身でした。／これは前にも申しましたように、海老名さんが英学校をやめた後に、次の校長が決まるまでの校長代理として、来られたわけです。／海老名さんが熊本へ来られたのは、一



方から言うとは、組合教会の九州探題ですもんな。ここへ来る時には、本人も非常な決心覚悟をもって、やって来られたわけですから一時的な人選とはいっても、そのあとを任せる者の人選となると、いろいろと気を配ったんでしよう。海老名さんをはじめ、同志社のことを多少知っておる人が、話しあって推薦したのが、柏木義田さんだったわけ（6）です。

福田の談話はこの言葉の前後にも当時の海老名と柏木の印象を生きいきと伝えている。海老名は人を惹きつける魅力に富んだ活動家であり、雄弁であり、教育者としてもすぐれていたこと、柏木は信念を貫く、善良な人柄で勉強家でもあったが弁舌には力が無く、むしろ文筆の人であったことなどである。そのなかには両者の相違をあらわす、つぎのような逸話も語られている。

ずっとあとで、私が西洋から帰った後のことですが、柏木さんにお会いした時、／「先生は実に十年一日のごとく、終始一貫した人でございますな」／と、私が申しましたところが、そばにいられた海老名さんが、／「あんまり十年一日のごとく終始一貫しすぎてね……」／と言って、笑われたことがありました。（7）

海老名の後任の校長代理として熊本英学校に赴いた柏木であったが、一八九二年（明治二五年）、蔵原惟郭が帰朝して五月一日に校長就任式が挙行された際に一つの事件がおこった。英学校教員の奥村禎次郎が歓迎の辞をのべたなかに、「吾人の眼中には校長も生徒も国家もなし。ただ真理あるのみ」という言葉があった。そのため『九州日

々新聞」が熊本英学校は無国家主義であるとしたため、問題になり、県知事松平正直も奥村の解雇を命令するに至った。これに対して海老名はやむをえぬという態度をとったため、奥村は辞任した。そのため奥村擁護の立場に立っていた柏木は辞職することに決したのである。

このあとは両者の間に直接的、あるいは生活面での新しい接触はほとんどなく、以後はもっぱら思想的、社会的な問題について柏木が海老名を批判するという間柄になる。もっとも、その間にも私的な関係や友誼は継続している。その思想的、社会的問題における海老名と柏木の接触のうち、重要と思われるのは日露戦争、朝鮮伝道、海老名の同志社総長職の三つの問題である。

海老名は日本伝道会社社長から神戸教会牧師となり、さらに東京に出て本郷教会を創設し、『新人』を発行して活躍する。いっぽう柏木は熊本英学校を辞したのち同志社に復帰したが、経営上の問題で首脳陣と意見を異にして辞任し、安中教会牧師に就任、『上毛教界月報』を刊行しはじめる。そして一九〇四年（明治三七年）二月にはじまった日露戦争に関して両者は正反対の態度を示す。海老名は『新人』に「聖書の戦争主義」を執筆して、『旧約聖書』中の歴史はおおむね戦争史であり、『新約聖書』ではイエスは理想としては非戦論を唱えたが、実人生では戦争を許容しているという趣旨を記し、また「戦争の美」と題する説教では戦争は現実には醜悪な面も持っているが、国家のために一身を犠牲にしてたかかう精神は美であるという主張をしている。

柏木はこのような海老名の戦争論に直接、言及してはいないが、非戦論を唱えたことからいつて内容的には海老名批判をしたといえよう。すなわち日露開戦の少し前から柏木は『上毛教界月報』に平和主義や戦争反対の説をしばしば発表するようになる。「非戦論、国是論」には軍備拡大は経済の破綻をまねくゆえ、わが国はあくまで平和

を国是とし、品性をもって東洋を教化すべきであると論じた。<sup>(10)</sup> さらに「戦争に対する吾人の態度」において殺人行為としての戦争の残酷、軍費増税による国民生活の圧迫、戦地人民の悲惨などをあげて、その罪悪を糾弾している。<sup>(11)</sup> また「非戦主義を宣明するは宗教の天職也」では、正義のためと称して戦争を是認する宗教家は、目的は手段を神聖にするという誤謬に陥っていると説いている。<sup>(12)</sup> そのほか日露戦争の前後を通じてほとんど毎号、なんらかの非戦論を載せており、これらは海老名の戦争讚美と対極をなすものであった。

つぎに朝鮮伝道問題である。海老名は本郷教会牧師時代の一九一〇年（明治四十三年）にはじめて朝鮮に伝道旅行を試みて以来、しきりに朝鮮人教化を唱え、組合教会がすでに一九〇三年（明治三十六年）に第一九回の総会において朝鮮伝道の開始を決議していること<sup>(13)</sup>を推進して、直弟子の渡瀬常吉を朝鮮伝道専従者たらしめた。それに対して柏木は朝鮮人教化が日本臣民化につながることを、また組合教会の朝鮮伝道が朝鮮総督府から経済援助を受けていることをきびしく批判した。

海老名は一九一〇年（明治四十三年）のいわゆる韓国併合を背景に、その前後に日本人と朝鮮人は兄弟としてアジアの大帝国建設に進むべきであり、その一体化の精神原理としてキリスト教信仰があると主張した。海老名はそのような思想を「朝鮮同胞の将来」「朝鮮の教化」「併合後の朝鮮」「朝鮮基督教の使命」などに記したが、のち『国民道徳と基督教』<sup>(14)</sup>にまとめられた。

柏木が批判した対象は海老名の言説ではなく、海老名の高弟ともいえるべき渡瀬常吉の思想と行動であった。渡瀬は組合教会の朝鮮伝道主任として一九一一年（明治四十四年）に京城に赴任し、一九一三年（大正二年）に『朝鮮教化の急務』<sup>(15)</sup>を著した。それに対して柏木は『上毛教界月報』に「渡瀬氏の『朝鮮教化の急務』を読む」<sup>(16)</sup>を書いて、朝鮮

伝道の目的が朝鮮人の日本臣民化にもあるのは、純粹の福音伝道ではないとし、またこの伝道が朝鮮総督府から六千円の匿名寄附を受けている事実を指摘糾弾した。さらに一九一九年（大正八年）の三・一事件にかけて、なんども朝鮮伝道の非を唱えているが、それらは「黒幕」としての海老名を間接に批判したものといつてよい。

第三は海老名の同志社総長職に対する柏木のかかわりである。海老名は一九二〇年（大正九年）三月に本郷教会牧師を辞して、同年四月に社長兼校長の原田助が学内の対立から不信任されたあとの同志社総長に就任した。そのすこし前の三月一〇日に柏木は一書を呈して、海老名の同志社赴任に当初は反対であったことをのべ、さらに就任の上は同志社において教育勅語の使用を中止するよう要望した。また一九二二年（大正十一年）には『上毛教界月報』に「政府が思想問題に立入るは国家百年の大害<sup>(17)</sup>」を書いて、政府のいわゆる思想善導を批判し、また海老名が「同志社は過激思想を出せしことなし」と言明したことに疑義を呈した。さらに海老名は一九二八年（昭和三年）一月、いわゆる御大典中に御所に近い同志社で出火があったことを遺憾として総長を辞任した。その辞めかたに対して、柏木は『上毛教界月報』に「一疑義<sup>(18)</sup>」を記し、海老名の辞職は教育に責任を負う方法ではないとして疑念を提出している。

海老名と柏木の交渉は以上のほかに、小さなものとしては一九〇七年（明治四〇年）三月に柏木が安中地方の集中伝道を企て、その講師の一人として海老名を招いたこととか、柏木は姉むろが住込んで働いていたこともあってしばしば海老名家を訪問したことなどがある。以上が両者の接触の概要であるが、そのとき海老名と柏木がたがいに相手をもどくように見ていたかについては、つぎに項目を改めて考えてみたい。

- (1) 『上毛教界月報』一九〇八年(明治四二年)七月、一一七号。なお本稿に引用または参照の『上毛教界月報』は、すべて伊谷隆一編『柏木義円集』第一卷一九七〇年、第二卷一九七二年、未來社による。
- (2) 前掲誌、同号。
- (3) 柏木義円の生家の家族は父徳円、母やう、異母姉とよ、同母姉せき、同母姉むろであり、義円は末子で長男であった。
- (4) 『上毛教界月報』一九三二年六月、三九一号。
- (5) 熊本日々新聞社編『百年史の証言——福田令寿氏と語る』一九七一年、日本YMCA同盟出版部。
- (6) 前掲書、一一四頁—一一五頁。／は改行をあらわす。
- (7) 前掲書、一一五頁。／は改行をあらわす。
- (8) 渡瀬常吉著『海老名弾正先生』一九三八年、竜吟社、二七四頁—二八三頁。
- (9) 前掲書、二八三頁—二八五頁。
- (10) 『上毛教界月報』一九〇三年八月、五八号。
- (11) 前掲誌、一九〇四年三月、六五号。
- (12) 前掲誌、一九〇四年一〇月、七二号。
- (13) 湯浅与三著『基督にある自由を求めて——日本組合基督教教会史』一九五八年、私家版、三二七頁。
- (14) 海老名弾正著『国民道德と基督教』一九二二年、北文館。
- (15) 渡瀬常吉著『朝鮮教化の急務』一九一三年、警醒社。
- (16) 『上毛教界月報』一九一四年四月、一八六号。
- (17) 前掲誌、一九二二年七月、二八一号。
- (18) 前掲誌、一九二八年一月、三六〇号。

### 三 柏木義円の海老名弾正観

ここで当然、海老名弾正と柏木義円、相互の人物観をのべるべきであるが、にもかかわらずこのような題目を掲げたのは柏木の海老名観については多くが語られているにもかかわらず、海老名の柏木観についてはほとんどなにも残されていないからである。

まず、その少い海老名の見た柏木像について触れておきたい。海老名の伝記には代表的なものとして渡瀬常吉著『海老名弾正先生』<sup>1)</sup>があるが、これは海老名の手記や著書を編集した部分が大半を占めている。そのなかで海老名の自叙伝的手記からの引用中に、つぎのような柏木への言及がある。きわめて短い文章であり、しかも客観的な事実のみで批評はなされていないが、これがおそらく海老名の著述中、唯一の柏木論であろう。海老名の安中教会牧師時代の記事である。

秋間、後閑、峰、土塩の諸村にも信者は続出し、後閑村には小会堂をも建築した程であつた。土塩村より有望と思はしめた青少年が学に志し、同志社に行つた。又同村小学校長たりし柏木義円君は、京都同志社に学び、後年安中教会牧師となつた。<sup>2)</sup>

また、海老名が柏木に送つた手紙の類は現在、柏木の長男隼雄の未亡人柏木清子所蔵として三通だけ残されている

る。逆に柏木から海老名に宛てたものは海老名の長女海老名道子所蔵の「海老名弾正史料」に七通あるが、これについては後述する。海老名の柏木宛の手紙は日常の用件や儀礼的なもののみで、柏木観はあらわれてはいないが、海老名の柏木と母やう、姉むろ、その長女うたよへの配慮を示す一通を紹介しよう。なお力はむろの長男である。

拜呈仕候。陳者益々御奮勵、教会之為ニ御配慮被下候由、時々伝聞乍蔭喜居申候。扱、爰ニ愚妻と篤と申合、且室子とも申談し、尊兄之御意見を承り度ハ他ニあらず、力之変死以来、取分歌代の事も氣ニ懸り段々年もゆき候故ニ良縁をも求めざるべからず。就ては室子を拙宅の下女としてハ何んとなく心劣りせられ候。小生ハ予て小生の妹として良縁を求め度存候ひしも、矢張不十分に候間、独立の家を立る様致す方宜敷らんと存候。歌代も来年四月ハ卒業、其後母子拙宅の近辺ニ一家又ハ一室を借り、洗濯裁縫を以て勤勉せバ月々七八円ハ収入可有之候。歌代も裁縫之方未熟ニ候間、之を修行する便利とも相成可申敷、尤も家賃位ハ拙宅より御世話申心組ニ御座候。且爰兄も目今の事情、御尊母様と御同居ハ少々六ヶ敷からんと御推察申上候。然るに安中の信者達ハ頻リニ御令室様の御同居を願ふ様子ニ候。尊兄固より御尊母様と御同居、御孝養なされ度候ハんが田舎の事なれば御尊母様が会堂の裏にて仏御信心被遊候ハ如何あらんと遺念被致、此義乍蔭御案申居候処、御尊母様室子御世話被成候ハ者、尊兄ニも御安心と存し、ソコデ拙者の考ニよれば前陳の策ハ一挙兩得かと被存候。尊兄の御入用ハ尤かさみ候へども、御母上様へ五円も御供へ被成、室子歌代にて七八円も得、且拙宅より小々にしても補助致候ハ者、毎月十五円位ハ収入可有之候。然ラハ三人の生活出来可申敷、御尊母様も時には築地又ハ浅草本願寺へも御参詣出来可申、上州と東京とハ五時にて通行出来候故、御往来相叶可申、斯く相成候ハ者歌代も一種の氣品を修養す

るに心劣りせらるゝことも可無之、安中信者も満足し御牧会の都合も宜敷るべく、御尊母様も御安心あるべく、旁以て一挙三得と被存候二付、尊意之程御伺申上候。右用事迄。草々。

十二月六日

海老名弾正

柏木義円殿

尚々本郷教会も益好都合ニ御座候。

尚々阿部家の相続ハ室子ニ致す外なしと存候。御同意ニ候ハ者、別紙御記名御調印、猶御親族老人記名調印之必要有之候間、何卒可然御親族御撰定御依頼、且此届書遅くも本月廿日過迄ニ相届候様、御手数願上候。

海老名が日常に柏木をどう見ていたかについて、海老名の次女大下あや談によると、「ときどき警察から電話がかかって、『いま柏木義円氏がそちらに来ていませんか』というのです。安中から東京行の汽車に乗られるとすぐわかるらしいですね。大逆事件のあとの頃から、そんなことがありました。もっとも警察も『来たら知らせてほしい』とはいいませんでしたけれど。柏木さんは姉さんのむろさんがおられたこともあって、よく来られ、むろさんだけに会われることもあり、ときどきは父の書齋で長い話をして行かれることもありました。子供の時のことですから内容はわかりませんが、あとで父が『時間的に負けるわ』といていたのを覚えています」という。

「時間的に負けるわ」とは柏木が長時間かけて社会問題などを論じ、そのねばり強さに海老名は閉口したという意味であろうか。海老名が柏木について言及するところすくなかった理由は、海老名からいえば柏木は洗礼を授けた者であり、ある意味では弟子といつてよく、周辺にいた多数の人々の一人に過ぎなかったからであろう。また海



## 『上毛教界月報』中の海老名弾正への言及

(○印重要)

- |                         |                 |      |
|-------------------------|-----------------|------|
| ① 「予は如何にして基督教信者となりしか」   | 1908年(明治41年) 7月 | 117号 |
| ② 「予が回心の顛末」             | 1916年(大正5年)11月  | 216号 |
| ③ 「基督再臨問題に就て」           | 1918年(大正7年) 8月  | 237号 |
| ④ 「政府が思想問題に立入るは国家百年の大害」 | 1922年(大正11年) 7月 | 281号 |
| ⑤ 「鎌田文相に望む英断ニツ」         | 1923年(大正12年)10月 | 290号 |
| ⑥ 「二つの感謝」               | 1928年(昭和3年)12月  | 360号 |
| ⑦ 「一疑義」                 | 1928年(昭和3年)12月  | 360号 |
| ⑧ 「同志社教育の俗化」            | 1929年(昭和4年) 5月  | 366号 |
| ⑨ 「同志社紛糾責任」             | 1929年(昭和4年) 5月  | 366号 |
| ⑩ 「内村鑑三先生と徳富芦花君」        | 1930年(昭和5年) 8月  | 381号 |
| ⑪ 「『生命の泉』記者へ」           | 1930年(昭和5年)10月  | 383号 |
| ⑫ 「組合教会時弊論」             | 1931年(昭和6年) 5月  | 390号 |
| ⑬ 「海老名先生と私」             | 1931年(昭和6年) 6月  | 391号 |
| ⑭ 「予は如何にして基督信徒となりしか」    | 1935年(昭和10年)12月 | 446号 |
| ⑮ 「安中の三十有八年」            | 1936年(昭和11年) 5月 | 451号 |
| ⑯ 「海老名弾正先生を憶ふ」          | 1937年(昭和12年) 6月 | 466号 |
| ⑰ 「私の姉と海老名先生」           | 1937年(昭和12年) 7月 | 467号 |

466号と467号は『新生命』

老名のほうからは思想の相違もあって柏木をそれほど重視していなかったことをあらわしている。

しかし柏木にとっては海老名は自分を信仰に導いた師であり、組合教会の先輩であり、さらに信仰理解や思想も異なる点では好敵手であり、批判に価する大物であった。

そのためか柏木の主要著作である『上毛教界月報』およびその後継誌『新生命』のなかにも海老名への論及は少くない。別表はその一覧である。ここでは主として、そのなかの重要なものを紹介していききたい。文章の執筆や発表の順序によらず、前項にあげた両者の接触の経過に沿ってとりあげてみよう。

海老名と柏木の最初の出会いは安中における三宗教立会演説会であり、その時のこ

とをのち一九〇八年（明治四二年）に回想した「予は如何にして基督教信者となりしか」の一部はすでに引用したとおりである。そこで海老名の「真面目なる精神に痛く打たれ」たと記しているのは、柏木の海老名に対する第一印象であり、最初の海老名観と云ってよいものである。

興味深いのは、そのなかで海老名の「演説には別に感服致せし事は無之候へしも」と記していることである。信仰に導いてくれた人について語る際に、これは普通いわない言葉であるが、それをわざわざ記しているところに柏木の海老名観がよくあらわれている。この点、伊谷隆一が『非戦の思想——土着キリスト者・柏木義円』のなかで「海老名について『其演説には別に感服致せし事は無之候』と断言しているのは、海老名の演説を語るよりもより多く柏木を語っている<sup>(5)</sup>」としているのは同感である。このような一言を挿入せずにはおれないところに柏木の性格と思想、さらに海老名と柏木の関係があらわれている。

また柏木は海老名の祈禱によって回心したことを同じ文章のなかに記しており、すでに引用したが、そのなかに「然るに、明治十六年十一月四日不図安中教会の礼拝に列し、海老名氏の説教亦何の感も与へざりしが、折しも聖晚餐式にて」とあるのは、さきの部分と同断である。海老名の演説も説教も、ともかく弁舌からは感動を得ることはないというところに、あるいは海老名の雄弁さとは対照的に弁論においてふるわなかつた柏木の隠された心理、あるいは一種の劣等観念が顔を覗かせているともいえるだろう。

この回心の時の様子を柏木は一九一六年（大正五年）に再び、「予が回心の顛末」と題して記している。そのなかにさきの「予は如何にして基督教信者となりしか」と同様のことをつぎのように記している。

斯くして居る中に、前述の友人に誘はれて或る日曜安中の会堂に参つた。礼拝の説教が終つて聖餐式が執行された。海老名牧師の説教には別に感じもしなかつたが、聖餐式の祈祷に「今此処に居る人の中でまだ此の聖式に与ることが出来ない者があるならば、次の此式迄には与ることが出来るやうに」と云ふ言があつた。予は此の祈りに同じたと思つたが、不思議！此時一大力が入り来て予の心を動かしたかの如くに感じ、今迄東を向いて居た者が西を向いた如く自分乍ら自分の心の変化に驚いた<sup>(6)</sup>。

ここでも「海老名牧師の説教には別に感じもしなかつたが」とのべているのは、回心の當時を想起するときには必ず記さなければおれないコメントであつたようである。すくなくとも柏木は海老名の雄弁に対して敬意をもたなかつた。しかし海老名の弁舌が人々にいかに感動を与えたかという証言は多い。たとえば一八八七年（明治一〇年）に海老名が熊本英学校校長になつたとき、教員として海老名の講話に接した渡瀬常吉は「先生が講堂に立ち、長髯を振り、朗々たる美声を以て、或はルツテルを説き、或はパウロを引いて、其の理想の神人基督に及ばるゝ時などは、全く恍惚として多数の学生と共に夢心地となり、或は感奮し或は熱涙を掬し、真に時の移るを知らなかつたのである」と記している<sup>(7)</sup>。

また一九一〇年（明治四三年）に海老名が初めて朝鮮伝道を試みた際に、その講演を聴いた松本雅太郎は「実に偉らしい演説であり、一千の聴衆は酔へるが如く、其高潮に達する毎に、拍手万雷の響くが如く満堂靈感に溢れた<sup>(8)</sup>」とのべている。一般にはこのような感動を与える海老名の演説であつたからこそ、柏木には無感動であつたのだろうか。

回心の前後に接した海老名についての柏木の感想はさらに『上毛教界月報』をひきついで『新生命』の「海老名弾正追悼号」の「海老名弾正先生を憶ふ」にものべられている。そこには回心前の出来事として、つぎのような話が記されている。

或る日曜日に安中の礼拝よりの帰るさに予が家に泊られ夕食終るや予が机上に聖書の在るのを見て常に之を御覧になるやと問ひ、更に罪があると云ふ事を御存知かと言はるゝから罪があると云ふ事は知らないが心の卑いと云ふ事は知つて居ると言うたら其の心の卑いと云ふのが即ち罪である、然らば其の卑い心を如何になさるかと問はるゝから其れには実に当惑して居る、モーサーの心は出すまいと決心したく思うても何時またそれが起らぬとも凶り難く自分の心で自分の心の保証が出来ないには困つて居ると云へば其れは当然である、卑い心で卑い心の矯正が出来るものでない、更に高い者に頼らなければならぬ、高い山より身を谷底に投ぐるやうな決心が大事だと言はれ余りにも話が緊張したから他の談にも移り難く互ひに無言にて居り終りに床に入つて仕舞つた。其れで今迄多くの人に交つたが我心事に就て斯くも心を入れて直言して呉た人とはなかつた、若し果して信じ可きであつたならば何物を犠牲にしても信ぜざる可らず、さうで無いならば亦其理由を明かにして之を謝絶す可きである、徒らに無断に置くは友誼に背くと感じ、之より信ずか信ぜぬか、之を明白にせざる可らずと決心して求道の志を起して終に安中教会に於て海老名先生より洗礼を受けてクリスチャンとなつたが其時予は廿四歳であつた。

なお、この「海老名弾正先生を憶ふ」のはじめのほうには柏木が海老名に始めて会った例の立会演説会のこと  
が語られており、さきにあげた文章には欠けていた演説者の氏名などが明記されているので、その部分を引用する  
と、萩原州平の甥の根岸小弥太と演説会を企画したとして、「其の小弥太氏の発意で学校で耶仏神の立会演説をや  
らして見やうぢやないかと云ふので小弥太氏が海老名先生を予が妙義の神官白井巖氏、高梨村起勝寺住職市川全寛  
氏を招くことになつたが、白井氏は来られず海老名先生は単衣に兵子帯（礼拝でもさうであつた）」と云ふ扮装で来  
られ市川氏と共に演説せられたが予はこゝに始めて基督教に接して之に對して畏敬の念を生じた」とある。ただし、  
ここには例の海老名の演説には感動しなかつたという趣旨の言葉は記されていない。

つぎに柏木の姉むろが海老名家の世話になつていたことに関して、柏木は一九二八年（昭和三年）六月の『上毛教  
界月報』の「海老名先生と私」に「〔むろは〕七十三歳で永眠するまで、極めて満足して海老名家御庇護の下に感謝  
して居た。海老名先生は実に姉を通じての私の恩人であつた」と記している。また一九三七年（昭和二年）七月の  
『新生命』の「私の姉と海老名先生」には、「其れで娘〔むろの娘うたよ〕は母〔むろ〕を其家に迎へて事へんと幾た  
びか之を勧めたるも彼女は終りまで海老名家に事へんと志を堅守して動かなかつた（別に御役にも立たなかつた  
であらうが）。以て海老名家の御親切が如何に深く彼女の心を囚へしかを想見す可きである」とのべている。

はからずも、前項に引用した海老名の柏木宛の手紙の後日譚の一端がここに語られている。あの手紙の内容をあ  
わせ考えるなら、当然のことであるが、柏木は海老名に對してきわめて丁重である。あるいはこのような態度が根  
底にあったからこそ、思想上の問題では安心して批判をのべることができたのかも知れない。

おなじ「海老名先生と私」のなかで熊本英学校の奥村禎次郎事件に関しての見解では海老名が奥村辞任に賛成、

柏木が反対という意見対立があったことについて、「これ私が海老名先生と意見を異にした始めであつた<sup>(13)</sup>」と記している。またさきにも引用した「海老名弾正先生を憶ふ」には「此時〔奥村事件〕より以後海老名先生と湯浅氏及び予とは意見相反する事が随分多かつた。殊に寺内総督時代の組合教会の朝鮮伝道に關しては其の最も著しきものであつた。先生もあなた方と何うして斯く意見が異なるかと仰せられた事もあつた。予は個人として先生の恩顧を受けし事多大であつたが公事に於て先生に同じ難き事の多かつたのは頗る遺憾とするところであつた<sup>(14)</sup>」とのべている。

奥村事件以後の海老名と柏木の接触、むしろ内容的には反撥は日露戦争、朝鮮伝道、海老名の同志社総長職の問題において顕著であることはすでにのべた。そのなかで柏木が直接、海老名に対して批判の言を呈したのは同志社総長職についてである。

柏木は海老名の同志社総長就任について校友として意見を求められたときに反対を表明している。その経緯はさきあげた「海老名先生と私」のなかに「同志社総長の椅子が殆んど同志社先輩の間を廻り尽して、其のお鉢が將に先生に廻り来んとするや、先生は同志社校友大多數の希望とあれば就任す可しとの条件を提出された。是に於てか同志社は、全校友に向つて其賛否を問へ、返事を致さぬ者は賛成と看做すとの事であつた。私は敢て不賛成を表明した。他にも幾多不賛成を表明した者もあつたらう。併し返事せぬ者は勿論大多數、先生は大多數の賛成で同志社総長の椅子に就かれた<sup>(15)</sup>」とある。だれに対してもはばかることなく、所信を明確に表明するところに柏木の面目が躍如としている。

ところで海老名の総長就任が決定したのち、柏木は親書を送って、およそ聴き入れられそうにはない独自の進言

をしてゐる。これは柏木の海老名宛書簡中の白眉であり、おそらく柏木の全書簡のなかでも、もっとも価値のある一つと考えられる。

拜啓／国際聯盟ニ就テ特ニ御精神ヲ注ガレ御意見モ各紙ニテ拝見大ニ意ヲ強フ致シ喜ビ申候。我国ニモ同志ノ之ニ関スル協会ノ起ランコトヲ希望致シ候。同志社ノ義ニ付テハ中村氏ノ御照会ニ対シテハ、小生ハ不賛成ヲ表明シタル一人ニテ候。併シ既ニ御就任ニ御決定ノ上ハ百年千年ヲ期シテ御成功ノ程ヲ衷心ヨリ奉祈候。／日本教育ノ根本ノ偽善ナルコトハ夙トニ御熟知ノ事ト存候。之ヲ去ラサル限りハ永ク国民ヲ誤ルノミト存候。日本教育ヨリ教育勅語ヲ撤去セサル限り偽善ト形式トヲ免レサルコト、存候。此事ハ屢々月報紙上ニ於テ之ヲ論ジ、近年「大隈首相ノ失言」ト題シテ論述仕候。御参考ニ供シ候。勅語ノ趣旨ニ從テ教育ヲ施スト云ヘバ誰シモ之ヲ評スルモノ無之、德育問題ノ為ニ深く研究スルノ精神ヲ失ハレタ<sup>(タ)</sup>滔々形式的ニ流ル、ハ今日ノ通弊ニ候。去ル紀元節ニ於テ千葉ノ医専ニテハ其拜賀式ニ参列スルモノ六百ノ生徒中僅ニ廿六名ニテ教授職員ノ方多有之候<sup>(タ)</sup>之由。一葉落チテ天下ノ秋ヲ知ル。コレ形式的教育ノ破綻ノ一端ト存候。／往年ハ西園寺<sup>(タ)</sup>候文政ニ当リテ勅語撤回ノ主張ヲ持シ、当時勅語発布ノ文相<sup>(タ)</sup>荒川氏ノ手前行ハレス。今頃ハ民間雜誌中ニモ此意見ヲ主張セシモノ有之候。明治天皇ノ追悼会ナドニテ御下文ヲ読ムノハ兎ニ角、今後何時迄之ヲ読ミツバケントスルカ、今更止メル機会ナキニ苦シムコト、存候。去リトテ之ヲツクレバ僧侶ノ読経ノ如キモノトナリテアルノミト存候。／私立学校ガ世間ニ迎合シテ之ヲ読ムニ至リタルハ不思議ノ至リト存候。／今回同志社へ御赴任ノ上ハ先ツ第一ニ式日モ勅語奉読ノ形式ヲ廢シ、止ムナクバ寧ろ五条ノ誓文ヲ以テシ之ニ御換被遊様、小生ハ切望仕候。勅語ハ官僚政治家ガ倫理

思想統一ナド云フテ作爲的に作りシモノ、長ク潑刺タル人心ヲ支配ス可キモノニアラス。之ニ引キ換ヘ御誓文ハ由利公正氏が潑刺タル自然ノ精神ヨリ出デシモノ勅語ヨリモ寧ろ適当ト存候。ノ小生ハ日本教育改革ノ第一ハ教育勅語ノ撤廢ニアリト存候。勅語トカ御真影トカ云フモノヲ持チ出シテ居ル間ハ日本ノ教育ハ駄目ト存候。誤レル。皇室トカ国体トカ云フ来伝<sup>(マ)</sup>ヨリ日本ノ人心ヲ解放セラレサル限りハ如何計リ日本ノ進歩ガ阻害サル、カ不相知、此点カラ云フト因習的ノ拘束ナキ天空海闊ノ頭腦アル支那人朝鮮人ハ幸ニ存候。卑イ国家觀ニ打協的<sup>(マ)</sup>ナラサル自由思想家ハ反テ鮮人支那人ヨリ出ルナラント存候。ノ同志社教育ノ權威ノ為メ此事ヲ御断行被下候テハ如何ニ候ヤ。ノ御参考迄申上候。

三月十日

柏木義円

海老名弾正様

御令夫人様ニ宜シク願上候。隼雄ヨリ御親切ヲ蒙リク<sup>(マ)</sup>レト感謝シテ参リ居候。小生目下流感ニテ臥シ居リ尊上ニテ執筆甚タ乱筆御免被下度候。併シ熱モ大ニ下リ候。季雄ハ目下三十九度有之候。<sup>(16)</sup>

教育勅語に対するキリスト者の批判としては一八九一年（明治二十四年）一月の内村鑑三不敬事件に端を発する、いわゆる教育と宗教の衝突問題においてなされた内村、植村正久、大西祝、柏木らの立論が有名である。だが、それからほぼ三十年たった一九二〇年（大正九年）の時点で、なお教育勅語反対を主張し続けていたのは、おそらく柏木一人であろう。その意味でもこれは貴重な書簡である。海老名はこれを読んでどう思っただろうか。さきに引用した言葉を借りていえば、「終始一貫しすぎる」と苦笑したかも知れない。



この手紙の問題を傍証するものとして、一九二三年（大正二二年）十月に『上毛教界月報』に書かれた「鎌田文相に望む英断二ツ」がある。そこでは教育勅語を人命より重視する世間の風潮を批判して、末尾に近く「海老名弾正氏が新に同志社の校長に就任被致候節、吾人は劈頭教育勅語の奉読式を止められんことを進言致候得共、氏ハ形式に非ず精神に在りとして、依然前轍を踏襲被致居候」とのべている。

この項目の最後に海老名の思想傾向全般にわたる柏木の批評をあげておきたい。さきあげた「海老名先生と私」の文尾である。

先生は、往年大に神道を研究し、世は先生を目するに神道的基督教、日本的基督教を以てした。併し今は先生は頗る世界的である。／先生は又、嘗て戦争美を説かれた。併し今は平和主義者である（どれ程徹底した平和主義者か不分明なれど）。／先生は如何なる時代に神道的基督教で、將た如何なる時代から世界的になられたのか、又如何なる時に戦争美を説き、將た如何なる時に平和主義を高唱されたか、之を研究したならば先生を識るに於て蓋し余師があるかも知れぬ。／要之するに、先生と私とは神学思想上の事は別として、随分根本的の所に於て相容れない所があるやうである。併し、先生は実に私の恩人である。<sup>(18)</sup>

ここで柏木は海老名を評して、同時に自己との相違を示唆しているように思われる。その海老名と柏木の比較については項目を改めて全体的な考察を試みたい。

- (1) 渡瀬常吉著『海老名弾正先生』一九三八年、竜吟社。
- (2) 前掲書、一七一頁。
- (3) 巻紙に墨書、封筒なし。年号の記載はないが伊谷隆一氏の推定では一九〇六年（明治三九年）か一九〇七年（明治四〇年）頃のもの。なお句読点を付したほかは原文のままである。
- (4) 一九七五年六月一三日、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会に大下あや氏を招いたときの同氏の談話。
- (5) 伊谷隆一著『非戦の思想——土着キリスト者・柏木義円』一九六七年、紀伊國屋書店、二二頁。
- (6) 『上毛教界月報』一九一六年一月、二一六号。
- (7) 渡瀬常吉著『海老名弾正先生』、一七九頁。
- (8) 前掲書、三六一頁—三六二頁。
- (9) 『新生命』上毛教界月報社、一九三七年六月、四六六号（『上毛教界月報』よりの通し番号）。
- (10) 前掲誌、同号。
- (11) 『上毛教界月報』一九三一年六月、三九一号。（ハ）内は引用者。
- (12) 『新生命』一九三七年七月、四六七号。（ハ）内は引用者。
- (13) 『上毛教界月報』一九三一年六月、三九一号。
- (14) 『新生命』一九三七年六月、四六六号。（ハ）内は引用者。
- (15) 『上毛教界月報』一九三一年六月、三九一号。
- (16) 一九二〇年（大正九年）三月一〇日付、封書、ペン書、『上毛教界月報』用箋使用。句読点と改行符号（〽）を付したほかは原文のまま。なお、この手紙は『月刊キリスト』（教文館）一九七二年八月号の拙論「日本臣民・キリスト者——朝鮮伝道と柏木義円」に紹介したが、文末の家族への言及の部分省略したので、全文の公表はこれが最初である。
- (17) 『上毛教界月報』一九三一年一〇月、二九〇号。
- (18) 『上毛教界月報』一九三一年六月、三九一号。／は改行をあらわす。

#### 四 海老名弾正と柏木義円の比較

海老名と柏木はほとんど同時代人として、またおなじ宗教人、おなじ職業人として、さらに地域や学校や家族の問題においても少なからず重なり、触れあう部分を持って生きた存在である。しかしながらこの二人は客観的には類似した要素を共有しながら、主体的な生きかたや思想において大きく相違していた。

海老名と柏木を比較対照することは近代日本におけるキリスト者の類型を明らかにすることにも資するであろう。よく内村鑑三と植村正久と海老名弾正の三人をそれぞれ異なるタイプの代表的存在としてくらべることがなされる。<sup>(1)</sup>それは同時に各人の属した教派の特色を示すことにもなっている。しかし海老名と柏木は日本組合基督教会という同じ教派の人間である。そのことはこの教派が他の教派にくらべて自由であり、多元的であることをあらわしているのだろう。

ところで海老名は一八五六年（安政三年）九月十八日（旧曆）に誕生し、一九三七年（昭和二年）五月二十二日に亡くなった。柏木は一八六〇年（万延元年）三月九日（旧曆）の出生、一九三八年（昭和十三年）一月八日の永眠である。両者は僅かに生年において四年、没年において一年の差があるにすぎない。

海老名の生誕の地は筑後国柳河であり、終焉の地は東京である。柏木は越後国三島郡与板の産であり、群馬県安中で死んだ。出身地に関して海老名は南であり、柏木は北である。性格的にみて海老名には九州人の豪快、そして柏木には新潟人の粘り強さがあった。また二人が住んだ土地、活動した場所をくらべると海老名は熊本、京都、安

中、前橋、東京、熊本、京都、神戸、東京、京都、東京であり、とくに京都と東京という大都市が長い。柏木は東京、群馬、京都、熊本、京都、安中であり、京都がやや長いほかは後半生はもっぱら安中という地方の小都市で過ごした。海老名は都会型あるいは中央型、柏木は地方型といって差支えないだろう。なお外遊については海老名が歐米に四回でかけて、会議の代表になったり、各地で講演会を開いたりしており、朝鮮、満洲にもわたって伝道をしている。それにくらべて柏木は朝鮮に一度行っただけであり、それも私的な見学の旅であった。しかし「朝鮮を見ざるの記<sup>(2)</sup>」を書いて、朝鮮に対する日本の失政を鋭く洞察している。

出身階層、家、学校の問題についてみるなら、海老名は柳河藩士の家の長男であり、熊本洋学校と同志社英学校余科（神学科）に学び、横井小楠の娘で時雄の妹みや子と結婚して二男二女をもうけ、琴瑟相和は有名であった。柏木は浄土真宗の西光寺の住職の長男であり、新潟師範学校、東京師範学校、同志社普通学校を卒え、淡路の人平瀬かや子と結婚し、七男二女が生れたが妻に先立たれ、六十歳以後はひとりで子供を養った。

学問、教養としては漢籍や日本の古典についての素養は共通しているが、ともに英語はよく読み、海老名はドイツ語やギリシャ語も研究している。二人とも牧師としてキリスト教は専門であったが、海老名が同志社の英学校余科といわれた神学校で神学を修めたのに対し、柏木は同志社の普通学校に学んで、とくに神学を専攻せず、同志社予備校の教師としては聖書、地理、数学、作文などを教えた。海老名が神道にも詳しく、宗教学などを好んだのにくらべて、柏木は社会や政治の問題によく通じていた。文学や芸術はともにあまり関心がなかった。

二人の人のなりや性格的なものをみると、海老名は長身で美髯をたくわえ、社交的で魅力にとみ、包容力のある人物であった。そしてキリスト教界では教派を超えた有名な人であり、その名声は教育界やジャーナリズムの世界に

もおよんでいた。山路愛山の「我が見たる耶蘇教会の諸先生」には「海老名君は調子の善き人なり。誰にでも相手になりて其人の氣に入り(マツ)そうなる御世辞を云ひ得る人なり」とある。同志社では新島襄やJ・D・デヴィスらの教師を凌ぐ秀才を發揮したが、一方、七十歳を過ぎてもドイツ語やギリシャ語を勉強するという努力家でもあった。柏木は短軀で僧侶風の濃厚地味な目立たぬ人であり、「安中の聖者」とよばれたほどの誠実な人格者であった。今日でこそ思想史上の人物ということになっているが、当時においては一般にはもとより、キリスト教界でもあまり知る者のない無名の人であった。また本人は若年から虚言癖に苦しめられたというほど内省的であり、秀才というよりは努力家のほうであった。

話術と文才について、海老名はキリスト教界、とくに組合教会では宮川経輝と並び称される名演説家であり、宗教的雰囲気を漂わせて聴衆を酔わせることもできたが、文筆のほうはすぐれているとはいえず、ときに論理の飛躍が目立つところがある。柏木の話しかたについては同志社時代に教えをうけた山川均が、「私が一生涯に聞いた人間の言葉のなかで、柏木先生のほどトツ弁なものがないが、またそれほど熱誠のあふれたものなかった」といっているとおりであったらしい。文章のほうはいわゆる美文ではなかったが論理的に明晰な名文といわねばならない。

信仰の問題では海老名は熊本洋学校においてはじめてキリスト教に接し、ジェーンズの「祈祷は人間の職分である。神との交りである」という趣旨の言葉によって回心し、(5)彼から洗礼を受けた。ついで同志社時代に「神の赤子(まき)」としての自覚を得、また神との関係を「父子有親」と考え、いわば人格主義的な信仰をもつに至った。神学的にはキリストを神ではなく、神性を有するものとし、その意味では正統主義ではなく自由主義であり、聖書の解釈には歴史的研究を尊重したが、ユニテリアンにはならなかった。また日本固有の神道をキリスト教において包括しよう

とする、いわゆる日本のキリスト教を唱えた。

柏木はすでにのべたように海老名によってはじめてキリスト教に触れ、回心、受洗に至った。しかし同志社時代に新島襄の感化で正統主義的な信仰をもった。神学思想についてはあまり深く考究していないが、一応穩健中正な立場に立って、合理的な自由主義に対しては批判的であり、また直接的なキリスト再臨説を説くファンダメンタリズムをも斥けた。しかし、その神学は社会や文化の問題から独立した領域にあり、一方で柏木が強調した社会正義と信仰の問題とは二元的に存在しており、両者をかかわらせるダイナミックな、あるいは逆説的な論理は見当らない。

伝道や教会の問題については、海老名はあらたに伝道を開始し、新しい教会を創設するという型である。安中、前橋、東京、熊本がそうであり、神戸は違うが、二度目の東京でもそうであった。そして大都市の大きな教会に学生や知識人を数多く集めるのが得手であった。柏木はほとんど安中教会においてのみ長年にわたって地味な伝道を続けたが、これは地方の小都市の教会であり、会員の増減はあまりなく、学生や知識人はほとんどいなかった。伝道に関して海老名は説教型、柏木は牧会型といえよう。

また伝道に関連して、二人ともキリスト教のジャーナリズムを主宰していた。海老名は一九〇〇年（明治三十三年）に月刊雑誌『新人』、一九〇九年（明治四三年）におなじく月刊雑誌『新女界』を創刊しているが、内容はいずれもたんにキリスト教にとどまらぬ総合雑誌の色彩がよく、思想的にも多元的であった。そして本人も寄稿するけれど、むしろ各方面に執筆者を依頼したり、新しい書き手を育てたりした。それに対して柏木は新聞と雑誌の中間の形態で月刊の『上毛教界月報』を一八九八年（明治三十一年）に発行した。これは一面においては題名の示すとおり、群馬県一円の諸教会の連帯をはかりつつ、一面においては柏木の個人雑誌的な傾向がよかった。知友の寄稿や他

誌からの転載もあるが、柏木自身、各種の文章を多く執筆し、評論家としてもすぐれており、その主張は鋭かった。

師や弟子の問題については、両者ともに同志社において新島襄を師とあおいだが、海老名が才能においてはむしろ新島にまさり、しかし新島の人格には一目置いたのに対し、柏木は信仰、思想、人格のすべてにわたって新島を尊敬していた。海老名にとっては新島に接する以前に教えを受けたジェーンズがむしろ本来の師であり、全的な信頼を寄せていた。柏木にとっては新島以前には海老名が師であるが、すでに見たように、その思想に対してはそうとうに批判的であった。

弟子については海老名は多数かつ多彩な弟子を有したが、柏木のそれは少数であった。しかし、これは性格や能力の問題よりも、むしろ柏木が人間平等の立場に立って、人を弟子呼ばわりすることを好まなかった点を考えなければならぬ。海老名の弟子は渡瀬常吉のように師に忠実で保守的な牧師から、吉野作造のように進歩的な政治学者にわたり、内ヶ崎作三郎や小山東助のような政界人、小林富次郎や石川武美といった実業家、安井哲子、野口せい子らの女流もいて多士落々であった。また短期間で離れたが社会運動家の大杉栄や石川三四郎も海老名から洗礼を受けている。柏木は同志社時代に山室軍平や山川均らを教えたが柏木のほうからは弟子として遇するような態度には出なかつた。またその非戦論に感動して軍籍離脱届を出した須田清基のような人物がおり、近隣の同業の後輩菅井吉郎や桜井乾一郎などもいた。柏木にとってはむしろ教会員が上下関係のない弟子といえるだろう。

両者ともに同志社の出身であり、のちにそこでそれぞれ教員や総長に就任したりした。同志社人としてのありかたを見ると海老名はつねに主流にいて、学生としても総長としても同志社に多大の影響を与えた。しかし総長に就任するまでは、むしろ小崎弘道のほうが同志社人としては主流で、海老名はやや異端的な神学思想のためであって、

すこしはずれた位置にあったといえよう。また同志社において新島襄の精神を継ぐ者が真の主流であるという意味なら、熊本バンド出身の人々は大きな存在であったけれども、むしろ新しい流れといふべきだろう。柏木こそ新島の精神を継承する一人であった。一時、同志社の理事を勤めたこともあったが表立った活動を好まず、同志社のアウトサイダー、また批判者であることによつて、同志社の生命を保つ地下水的な存在であった。

海老名と柏木はそれぞれ社会や政治についてのどのように考え、それらにいかにかかわっていただろうか。海老名はどちらかというと権力志向的であり、柏木には反権力、権力否定の傾向があった。海老名は政治家的であり、政治力も十分に持ちあわせていたが、柏木は評論家的で、現実的な政治力は有していなかったと思われる。別の観点からすれば海老名は政治評論的であり、柏木は政治批判的であったともいえるだろう。海老名は国家主義者、日本主義者であり、それと必ずしも矛盾しない形で国際主義者であった。それは前期に国家主義的、後期に国際主義的であったともいえるが、それよりもその時代の主流的な風潮に同化しやすいタイプであった。柏木もナシヨナリストではあったが国家権力に対しては批判的で、むしろ民衆的、庶民的であった。海老名のような豊富な外遊の経験はないがキリスト教による国際主義、博愛主義の思想は有していた。また海老名が全体主義的傾向があったのに対し、柏木はむしろ個人主義的であった。伊谷隆一は柏木の初期の文章にある「愚俗の信」という言葉を強調して、大衆の原像として生きた土着の人として柏木を特徴づけているが、それはやや一面的に過ぎるのではないか。柏木にはキリスト教に影響された近代的な精神や個人主義の要素が少くないのである。

海老名は国家や社会の推移に対して状況順応的であり、戦争期には国家主義や主戦論を唱え、平和な時代には国際主義や平和論を謳った。これに対し、柏木は国家や社会の現状につねに批判的、抵抗的で、日露戦争のすこし前



から日中戦争に至るまで、その非戦論、平和主義は一貫していた。

海老名は大正時代に吉野作造の提唱した民本主義には賛成しているが、つねにデモクラティックであったとはいえない。しかし柏木は民衆的な精神、民主主義の思想をつらぬいた人である。皇室について海老名は一九二四年（大正十三年）の皇后の同志社訪問の際にあらわされたように、もっぱら崇敬讚美的であったが、柏木は天皇に王としての尊敬を払ってもよいが、神やキリストに対するような崇拜を捧げることは誤りであるとした。<sup>(7)</sup><sup>(8)</sup>

海老名と柏木の特色を思想と生きかたの全体にわたる簡潔な言葉であらわして結論とするなら、海老名は「変化発展」、柏木は「一貫不惑」、また海老名は「多元的」、柏木は「一元的」というべきであろう。海老名の及ぼした影響は広く、柏木の生きた軌跡は深い。

- (1) たとえば内村鑑三が植村正久は教会主義、海老名弾正は國家主義、自分を精神主義だといったのに対し、海老名は植村を教會的精神主義、自分を國家的精神主義、内村を精神的個人主義だといったといわれる。佐波亘編『植村正久と其の時代』第五卷、一九三八年、教文館、四三二頁。
- (2) 「朝鮮を見ざるの記」「再び朝鮮を見ざるの記」『上毛教界月報』一九二五年五月、三一八号。
- (3) 武田清子編『明治宗教文学集』(二)『明治文学全集』88)一九七五年、筑摩書房、四〇五頁。
- (4) 山川菊栄・向坂逸郎編『山川均自伝』一九六一年、岩波書店、一三八頁。
- (5) 渡瀬常吉著『海老名弾正先生』一九三八年、竜吟社、九五頁。
- (6) 伊谷隆一著『非戦の思想——土着キリスト者・柏木義円』一九六七年、紀伊國屋書店。
- (7) 渡瀬常吉著『海老名弾正先生』、四二六頁—四三九頁。
- (8) 「尊王本論」『上毛教界月報』一九二九年一月、三六二号。

付記 海老名弾正と柏木義円の書簡は杉井六郎氏に解説していただいた。感謝する。